

## 山村睦夫先生を偲んで

山 田 久

私が和光大学経済学部（現経済経営学部）経済学科の教員に採用されたのは、1987年4月でした。4月最初の顔合わせで、5人の新任教員が揃いました。私のほかに、牛江ゆき子先生（英語担当）、鈴木恒夫先生（近代日本経営史担当）、根本忠明先生（システム論担当）そして山村睦夫先生でした。当時の和光大学は、経済学部経済学科と人文学部人間関係学科、文学科、芸術学科の2学部4学科制度でした。経済学部は経営学科の新設を目指し、複数の専任教員を採用しました。経営学科新設のために3名、一般教養（現在の共通教養）に1名、そして経済学科の補充教員として1名の専任教員採用でした。しかし残念ながら牛江先生は1991年にお茶の水女子大学に、鈴木先生は1992年に学習院大学へ、根本先生は1996年に日本大学商学部へ移られました。

最初の公式の顔合わせの日が終了しましたが、先輩方や執行部の先生方からの非公式のお誘いはなにもありませんでした。男4人はまったくの新人というわけでもなかったのですが、こういう場合（初顔合わせ）は非公式にお誘いがあるものと思っていました。結局なにもないので、男4人で自己紹介などをしながら鶴川の駅まで歩いて帰ることにしました。30余年前の鶴川駅周辺は今とはまるで違って、閑散としていました。駅の近くの線路を渡ると、当時は目の前に八百屋さんがあって、その2階が「村さ来」という居酒屋でした。とりあえず居酒屋にでも行って、乾杯しようということになりました。

居酒屋ではそれぞれの出身やら来歴を語り合いました。その中で、山村先生が桐朋高校出身であることが分かり、私の2年先輩だということもわかりました。それ以来、非常に親しくさせていただきました。大学の同窓はよくある話ですが、高校の同窓は意外と少ないと感じています。

酒も入ってにぎやかにやっているときに、奥のほうの女性を含んだグループから声がかかりました。女性は人文学部の石原静子先生でした。石原先生は「君たちは新人さん、祝杯をあげましょう、こちらへいらっしゃい」と声をかけてくださいました。それから飲み会になり、我々はなんと他学部の先生方に就職祝いをしていただいたわけです。和光大学の話などいろいろとお聞きしたものです。

私は和光大学出勤の初日以来、20数年にわたって、山村先生には大変お世話になりました。他人には言えないような個人的な悩みから、職場に対する不満なども随分と聞いていただいたものです。私が喋っているときは、黙ってうなずいて聞いてくださるだけでしたが、でもそれだけで随分と心がおさまったものです。山村先生としてはまったく迷惑な話だったと思います。本当に申し訳なかったという気持ちで一杯です。

高校時代の恩師を同僚としてお迎えするという得難い経験を山村先生と共有することができました。2003年に三橋学長のもとで、大学以外の分野から経験豊かな教育者を特任教授としてお迎えするという制度が発足しました。世界史関係の分野では、私が推薦させていただいた元桐朋高校教師で、NHKのテレビ講座でも著名な綿引弘先生が採用になりました。綿引先生は私の高2、高3時代の担任でした。また山村先生が中学に入学したときに綿引先生は新任として桐朋中高に赴任されたそうです。私も山村先生も綿引先生に世界史を習っています。『和光学園七〇年誌』和光学園に勤めている人びと、現教職員一覧、2003.5.1 現在（328ページ）には山田久教授、山村睦夫教授、綿引弘教授と3人の名前がならんで掲載されています。綿引先生は私の高校時代の恩師で山村先生は2年先輩ですというみなさん驚かれました。実に愉快的な経験でした。

お通夜の席で奥様から伺った2つのことがとても印象に残っています。

山村先生は和光大学から名誉教授の称号を贈られたとき、非常に喜ばれたそうです。それを聞いて私は少し不思議に思いました、というのは、山村先生は世間的な名誉などにはあまりご興味がないだろうと勝手に思っていたからです。ところが喜ばれた理由は、まことに山村先生らしいものでした。それは名誉教授になれば『和光経済』に論文をいつでも投稿する資格ができるからということだったそうです。現役の教員である我々はいつでも『和光経済』に投稿できる特典を持っているのだという幸運をしみじみと感じた次第です。

山村先生のご遺作となる「5.30 事件と上海在留日本資本の対応—上海日本商業会議所を中心に—」『和光経済』第49巻第3号(2017.3)が出版されたときの編集委員長は、たまたま私が務めておりました。そのときの出版に関わる事情を少しご披露いたします。山村先生のご論文は大部なものが多く、校正などにもかなり時間がかかるものでした。この論文の校正の時は体調が悪くなられたため時間がかかっておりました。この『和光経済』は第49巻の最終号(第3号)で、年度内に出版できるかどうか、われわれ編集委員は時間との戦いで切羽詰まった状態にありました。山村先生は最後までご自分で校正したいというお気持ちでしたので、我々は先生のお気持ちを尊重し、最後の最後まで待って、もし間に合わなければ編集委員会の責任で校了しようという腹積もりでした。私は編集担当の當間先生に「最後は私が責任を取りますから、いざとなったら編集サイドの責任で校了しましょう」と宣言しました。そして「そのときは私が結城へ行って、先輩に頭を下げて謝ってきます」とも。しかし締め切りまでに校正は終了し、無事に出版することができました。その時の事情もお通夜の席で奥様からお伺いしました。先生はとにかくご自分で校正したいとお気持ちであったそうですが、赤ペンを持って文字にならなかったそうです。結局、先生の指示に従って校正を完成させたのは奥様であったそうです。そして無事期限までに出版され、『和光経済』第49巻第3号を病床の先生にお届けすることができました。先生は大変喜ばれて、では次の論文の準備をしなければと奥様に申されたら、奥様は涙ながらにご披露くださいました。私はそのお話をお伺いしたとき、背筋に衝撃が走ったような気がしました。先輩から後輩への叱咤激励のような気がしたものです。論文は書けるときに書きなさい、論文を書いてこそ学者だといわれているような気がしました。

人生における恩師は、人生の局面においてその時々存在するのではないかと思います。学生時代に将来の方向性を示唆していただいた恩師、研究者としての出発を導いてくださった恩師、人間としての生き方を示してくださった恩師、社会人としてのスタートを促していただいた恩師などではないかと思います。私にとって山村先生は人間としての生き方を示してくださった恩師でありました。山村先生に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。